



創立から昭和63年までの「想いで、 そうそうたるメンバーの中で培った 「信頼」と「絆」



群馬県高崎市の伊香保温泉「横手館」で開催された緑友会群馬大会。前列右から2人目が小栗氏、左側が小池氏、後列真中が大内氏。小栗氏はこの総会で緑友会幹事長に就任した。

名古屋而立会（伊藤亮二会長、而立会）が今年創立60周年を迎えた。10月14日に名古屋キャッスルプラザにおいて記念式典が開催される。昭和32年に印刷業界の若手有志が集い設立された而立会も、はや60年の歳月を育んだ。無論、創立当初と今日では、何もかもが大きく様変わりを見せている。現会員の中には平成生まれの方も在籍しておりその若さ分かる。OB会員の中には昭和生まれの方も見えるが、創立当初からとなると業界内を見回しても数少なくなる。そんなことから、創立間もない時期に入会し、今日まで而立会の歩みを見てきた経験から、何かのお役に立てばと思ひ紐解いてみることにした。ただ、昭和から平成に移る時に退会をしているので、創立から昭和63年までの30余年間であることをお断りしておく。平成からの話題についてはどなたかにお譲りしたい。

■「名古屋而立会は、1957年（昭和32年）名古屋印刷関連業界の若くて情熱を持った次世代の経営者候補たちが自主的に集い、勉強会・親睦会を始めたのがきっかけとなり名古屋而立会が設立された。名古屋而立会の「而立」とは、孔子の論語の一節である「三十而立」（三十 [30歳] にして立つ／学問で自立できるようになった）から名付けられている。

■小栗稔也初代会長は就任挨拶の中で、「名古屋而立会は、印刷事業並びに印刷関連事業に携わる青年若人の自主的な集まりである。その目的は、近代的な感覚を基に、相互の親睦を第一として、大いに目を外に向け、研究会、講演会、座談会などと共に技術の向上を計り、明日来るべき名古屋印刷界の一翼を担っていかなければならない。また、東京における同種の集まりである印刷同友会の提唱による、全国連絡協議会に参加する有意義かつ活発な集いである」と、設立の意義を述べている。ここから而立会の歴史がスタートした。

■設立時の会員は以下の各氏。犬養要七（犬養印刷）、市川量朗（太陽印刷）、長谷川昌史（新光印刷）、大鐘巖（菱源印刷工業）、小栗稔也（菱源印刷

工業）、大内信行（大信印刷）、川口隆市（川口写植）、田島重次（名城印刷）、高木亮一（八光）、田中博（田中転写）、津田麗嗣（津田三省堂）、長屋治（長屋印刷）、八木稔（八木印刷工業）、藤井修三（誠進社）、藤原富雄（阪田商会）、権田鋭三（文方社）、児玉一司（児玉インキ）、小谷裕三（東華色素）、小池銀彦（弘益印刷）、佐藤忠博（三秀社）、佐藤富之（佐藤印刷）、木野瀬久夫（木野瀬印刷）、湊四郎（湊印刷）の23名。

■全国連絡協議会が名称を変え、全国青年印刷人緑友会として誕生したのが昭和33年。設立総会が東京の製本会館において開催され、席上、小栗而立会会長が幹事に推挙された。その4年後、群馬県伊香保温泉で開かれた緑友会群馬大会において幹事長に就任している。名古屋而立会が大きくクローズアップされ、一躍全国区になった。（右ページ掲載写真）

■昭和34年といえば忘れもしない伊勢湾台風がこの地方を襲った年である。印刷業界も甚大な被害をこうむり、その復旧までには相当な歳月と費用を必要とした。緑友会ではいち早く行動を起こし伊勢湾台風義援金として1万7千円を委託。これを受けて而立会では、3千円を足して2万円とし、愛知県印刷工業組合災害対策本部に手渡した。ちなみに対策本部に集まった義援金は総額185万8800円余り。組合員53社が被害に合ったが、その被害額は1億2534万円余りにのぼった。当時、サラリーマンの平均月収が3万円の時代である。

■而立会が一段と結束を見せたイベントが、昭和37年6月に中小企業センターで開催した「躍進する印刷工業展」である。印刷業界の社会的地位向上を目指す、をスローガンに、5日間の会期中、連日多くの見学者で賑わいを見せ、大成功を収めた。そのお陰で「名古屋而立会ここにあり」と、印刷業界は無論のこと、他業界においてもその名を高めた。大河内信行会長の時である。

■この成功の余韻が冷めやらぬ2年後の昭和39年5月に、「第13回印刷文化典」が開催され、この文化典においても会挙げて応援を行なった。「Printing Week」と題した展示会では、而立会コーナーを設け印刷をアピール。大変好評を得た展示会となった。文化典といえば、昭和47年11月に「第21回印刷文化

典」が開催され、ここでも而立会の出番となり前回に増して大きな活躍をした。而立会は広報宣伝委員会を担当し、岩田宗雄会長が委員長を務めた。今回も全員参加でのお手伝いであったが、ただ、イベント会場がすべて異なっており、例えば、記念式典は名古屋市公会堂、記念講演は産業貿易館、機材展は吹上ホール、文化展覧会はオリエンタル中村百貨店、懇親会はホテルナゴヤキャッスルといった具合で、現在のように携帯電話やスマホなどが無い時代で、会期中、東奔西走しての活動が強いられたが、若さで対応したことを覚えている。

■昭和39年には、大変有意義な活動を行なった。長屋治会長の時であったが、それは12月の忘年会の席上で、どなたの発声であったか記憶にないが、「歳末助け合い募金、を行なうことになった。出席した皆さんに呼び掛け、菓子箱を回したところ、13,600円もの金額を集めることができた。翌日、長屋会長と棚橋峻氏の2人がNHKに出向き、歳末助け合いに託してきた。ただし、これ以後は行なわれなかったと記憶している。

■若手経営者が新聞や雑誌で取り上げられ始めた昭和44年。「情報交換や経営近代化へ「活躍する二世会」印刷業界ヤングパワーのモデル」と題して、而立会の活躍を報じたのが、同年3月30日付の毎日新聞夕刊である。少し長い引用になるが全文紹介してみよう。

「沈滞しがちな業界に新風を吹き込むため若い経営者の英知と決断力が要望されるおりから、名古屋市内に印刷業界の二世経営者で結成する名古屋而立会というグループがある。同会は33年4月、当時あった而立会（12人）と二世会（8人）が大同団結して発足したもの。自來十余年間、あらゆる情報の交換や経営の近代化にも一役買い成果を上げているが、時代の経営者を担う二世会のあり方を示す一つのモデルとして紹介しよう。

而立会は論語の「三十にして立つ」から取ったもので、30歳前後を中心とした将来経営者になるヤングパワー46人で結成。新人会員の資格は満35歳までと限定されている。会員の中には印刷機械、製版、製本、活字、インキなど関連業者の二世も含まれ、その数は会員数の三分の一を超えてはならないこと



名古屋而立会マークが披露された。写真左から岡田、吉田（秀）、竹田、棚橋、鶴飼、原、近藤、林の各氏。

になっている。45歳以上の者はOB会員として11人が参加している。

毎月18日例会を開きテーマを決めて討論会、講演会があり計数管理の重要性や中小企業近代化促進法と業界の在り方、構造改善の必要性と問題点、税務と金融、景気と金融の見通しなどを勉強している。

一方、印刷業界の当面の課題である賃金、印刷料金、技術改善などの情報交換を積極的に行ない他山の石としている。年1回の見学会では他産業の実情を視察することによって見聞を広め、印刷業界の現状分析にも役立っているという。

同会は会長、副会長（3人）、幹事（8人）計11人の役員で運営されているが、このメリットは、即効的な成果を期待するのはムリとしながらも、『①情報キャッチが円滑になったため経営方針を誤らない、②問題点解決のため会員から具体例が聞けるなど、非常に参考になる、③情報交換により同業者同士の助け合いができて能率的、④経営、技術両面のアドバイスが受けられる、⑤経営者は孤独との戦いであるといわれる。しかし同病相哀れむ者の集いであるためストレス解消に大いに役立つ』などを挙げている。（中略）

このように同会は、若き経営者の進むべき道を会員相互の堅いスクラムによって発見、力強く前進しているが、全国的な組織である全国青年印刷人緑友会に加盟することによって成果をさらに高めている。この全国組織は名古屋、東京、大阪など9団体が結成されており、機関誌緑友だよりが発行される

ほか、セミナーや大会が開かれている。大会は講演会の後分科会に分かれ、経営、技術両面の勉強をするほか、全国から集まった同志から各地の情報を聞くことができ、経営にプラスになっている」。

■名古屋而立会15周年記念大会が名鉄グランドホテルで開催された。会員、OB会員、緑友、来賓ら80余名が参加、盛大に開催された。昭和48年のことである。式典で岩田宗雄会長は「而立会も15年の歴史を築き上げてきた。これは何物にも代えがたい財産である。私たちはこの財産をさらに将来に繋ぐべく、今日の式典を機に、会員相互の団結と協調でさらに発展させなくてはなりません。これは私たち若手印刷人に課せられた使命であり、日ごとに強まっている。業界の地位向上のためにもお互いが研鑽を積み頑張らなくてはならない」と、さらなる発展を強調した。

■この席で新しく作られた「而立会の歌」が披露された。而立会音頭と同じく作詞は大河内秀一氏、作曲は棚橋峻氏である。記念大会における懇親会の席が一段と盛り上がったのはいうまでもない。その後、例会や懇親会、イベントがあるたびに而立音頭と共に歌われることになった。

〔而立会の歌〕

一、空に金鯨（きんこ）の輝きと 広がる大地は濃尾の野（や） 雄々しく伸びる中京の 文化を担う先鋒は われらが集い而立会

二、もゆる希望（おもい）を明日にはせ たゆまぬ力は先哲の 教えも今に新しく 共に語らい共に行く われらが仲間而立会

三、若き血潮（いのち）の雄叫（おたけ）びは 逆巻く怒涛（なみ）をばのりこえて ロマンの海に高らかに 謳（うた）う男の心意気 われらが宿り而立会

■印刷文化典の話題をもう一つ紹介する。昭和55年10月9日に名古屋印刷文化典が開催された。そのメイン行事として行なわれたのが松坂屋リビンザでの「印刷展（80NAGOYA PRINTING FAIR）」である。「印刷、いま、そしてあした」をテーマに4日間開催された。会場では、印刷とファッション、日常生活用品と印刷、印刷の未来、印刷と子供などのコーナーとともに、世界の秘蔵印刷物コーナーが設け

られ、数多くの歴史的印刷物が展示された。中でも、1833年に製造された手動印刷機の展示には高い関心が寄せられた。ここでも而立会会員の活躍が光った。会期の4日間は無論のこと、前準備や後片づけに翻弄されたが、「大成功。の声を聴くやその疲れも吹き飛んだ。会員の団結が確かめられその存在を強力にアピールできた。浅井隆宣会長の「而立会の総力を結集し全力投球で対処した結果である」との力強い言葉が思い出される。

■印刷展に併せA5判横開き26ページの「印刷を知ろう～現代社会で活躍する印刷技術～」パンフレットを作成した。簡単に印刷の歴史や印刷物が出るまでの工程、紙の知識や製本などを解説したもので、約3,000部作製。印刷展の来場者に配布したが、あまりにも多くの来場者に終日には底をつき、苦情をいただいたのを覚えている。

■この頃、「名古屋而立会会報」を発行しており、「印刷展」や「25周年記念式典」などの特集を組んだりしている。会報は、B5判8～10ページ、発行は不定期であった。

■名古屋而立会創立25周年が盛大に行なわれたのは昭和57年10月である。名鉄グランドホテルにおいて開催され、会員・OB会員・緑友、来賓を含め100余名が参集した。輝ける四分の一世紀を振り返り、小栗稔也初代会長から小池銀彦、大河内信行、八木稔、田中博、佐藤忠博、宇佐見礼次郎、大橋正史、大河内正雄、岩田宗雄、吉田秀雄、池田達彦、原勝彦、浅井隆宣の15代までの会長が出席（長屋治4代会長は亡くなられており欠席）し、竹田光宏会長から先人たちの努力をたたえ、感謝状と記念品が贈呈された。式典の挨拶で竹田会長は、「而立会も四半世紀を経て、会員56名を要する会にまで発展した。この25年の輝かしい伝統と歴史を持つ名古屋而立会をさらに発展させ、後に続く人たちにバトンを渡す責任は決して軽いものではない。25周年を迎えるにあたりこの認識を新たにすることである。さらなる親睦と連帯感の強化に努力したい」と、さらなる発展への決意を述べている。

■昭和58年を迎えた年、而立会として画期的な出来事が起きている。5月に下関のマリンホテルで開催された全国印刷緑友会下関総会において、元而立

会会長の竹田氏が緑友会会長に就任したことである。これは小池銀彦氏が幹事長になって以来、実に31年ぶりのこととなった。竹田新会長は「友愛の精神・自己研鑽をさらに推し進め、各地グループのより活性化への働きかけと、この困難な時代を乗り切るニューリーダー像の探求、さらにはより広く仲間を求め、少なくとも1県1グループの参加を目標に努力を重ねたい」と力強く挨拶している。新役員として、吉川正敏氏が書記幹事に就任し竹田新会長をサポートしている。

■ここで気になることは、竹田氏が緑友会の会長に就任したことは、而立会にとって大変名誉なことであるにもかかわらず、30周年、35周年、40周年、50周年と発行された記念誌を見ても竹田会長就任の表記は1行もない。緑友会の総会や大会、セミナーなどの記事や写真の掲載はあるが、会長就任が報じられていないことは残念でならない。次に記念誌を制作される折には、竹田氏の会長就任を加えていただきたいものである。

■昭和61年1月に開かれた新年会で、而立会のマークと会の旗が披露された。マークのデザインは当時東海紙工(株)に努めていた池田哲郎氏（現在、アトリエTZ代表）。

■創立30周年を迎えたのが昭和62年。記念式典は2月に東急ホテルにおいて開催された。席上、挨拶に立った近藤清彦会長は、「而立会音頭にもあるごとく「男30で立とうじゃないか。のごとく、而立つ会もその30歳がやってきた。大いに飛躍すべき絶好のチャンスである。今一度而立会の目的を認識し、英知と団結でさらに年輪を大きくしていくことが、我々の大切な責務である」と更なる飛躍を誓った。

（思いつくままに記した。間違いがあればご指摘をいただきたい）。